

# 大学生における関係的自己の可変性に関する研究

— Connected-Self および Separated-Self の観点から —

松下 姫歌・渋川 瑠衣<sup>1</sup>

(2008年10月2日受理)

A Study on the Relational Self in College Students  
— From the viewpoints of Connected-Self and Separated-Self —

Himeka Matsushita and Rui Shibukawa<sup>1</sup>

**Abstract:** The first purpose of this paper was to reexamine the scale measuring motives to change the self-concept according to social relations (the relational self). The second purpose was to examine the feature of variability of the relational self by investigating the relation between Connected-Self Scale (C-Scale) and Separated-Self Scale (S-Scale). Four hundred sixteen college students were asked to answer 4 questionnaires (the degree, the motives, and the sense of their perceived variability of the relational self, and C/S-Scale). The main results were as follows: (1) Factor analysis of the motives to variability suggested a 2-factor structure (intentional and unintentional/unconscious). (2) The degree of variability and intentional and unintentional/unconscious were higher in women than in men. (3) Intentional was related to high score of C-Scale and low score of S-Scale for women, and unintentional/unconscious was related to high score of S-Scale for women. (4) Women with a high tendency for S-Scale felt more positive sense of variability than those with a low tendency. These findings suggest that the two phases of self (Connected/Separated) may relate the individual and gender differences in variability of relational self.

Key words: relational self, Connected-Self, Separated-Self, college students

キーワード：関係的自己, Connected-Self, Separated-Self, 大学生

## 1. 問題と目的

### (1) 青年期と自己の可変性・多面性

人は、関係や文脈に応じてさまざまに自己を変化させ、それにに応じて多様な自己を認知している(吉田・高井, 2008)。特に、生涯発達の中で最も多様な人間関係を形成する時期(斎藤, 1996)であるとされている青年期は、心理・社会・発達の必要性から他者との関わりが拡大するため、それまでとは違った他者関係や役割に対応した自己を発達させる必要があるとされている(高田, 2004)。青年は、人間関係と同様、

多様に形成された自己理解や評価などに時に葛藤や混乱を感じながら(Harter & Monsour, 1992)、アイデンティティの確立と呼ばれる自己の統合を進めていくこととなる。

このような可変的で多面的な自己については、これまでパーソナル・コンストラクト理論(Kelly, 1955)や作動自己概念(Markus & Wurf, 1987)、関係スキーマ(Baldwin, 1992)といった理論が提唱され、友人や家族といったカテゴリーカルな関係性の違い(榎本, 2002)や相手との関係で予測される結果(新田・堀毛, 2007)によって変化することが明らかにされるなど、さまざまな視点から多くの知見が提出されている。

また、自尊感情や抑うつなど、精神的健康との関連

<sup>1</sup> 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

を検討した研究も数多くなされている。しかし、これらの研究では、研究者や背景となる理論によって結果が異なり、一貫した結果が得られていない。例えば、Linville (1987) が提唱した自己複雑性モデルでは、自己の分化度が高く、自己が一貫していないほどストレス耐性が高く、精神的健康度が高いとされている。同様に、Snyder (1974) が提唱したセルフ・モニタリング理論においても、自己の変容性や多面性は、柔軟で適応的な能力として肯定的に考察されている。その一方、Donahue, Robins, Roberts & John (1993) が提唱した自己概念の分化モデルでは、分化度が高いほど自尊感情が低く、抑うつ傾向が高いといった否定的な結果が一貫して得られており(吉田・高井, 2008)、自己の変容性・多面性は否定的なものとして捉えられている。

## (2) 自己の変容性・多面性を捉える新たな視点

佐久間 (2000) は、上記のような矛盾が、従来の研究が単なる変化の程度のみに着目し、変化の主体である個人の視点を考慮していなかったことに起因していると指摘している。そして、佐久間 (2001) は、「関係に応じた自己の変化に対する自覚」すなわち「関係的自己」に注目し、関係に応じて表出される自己のあり方に変化が生じる「理由」とそれに対する「意識」について、女子大学生の自由記述をもとに検討している。その結果、「変化理由」として、他者の気持ちや性格を考慮して自分を変化させる《他者考慮》、相手との親密度や役割の違いによって自分を変化させる《関係の質》、違う自分を演じ、本当の自分を隠すために自分を変化させる《演技隠蔽》、相手に自分を理解してほしいという願望から自分を変化させる《自己理解願望》の4因子が抽出され、これらを測定する「変化理由尺度」を作成している。また、そのような関係に応じた自己の変化に対する《肯定的意識》と《否定的意識》の2つの「変化意識」を測定する「変化意識尺度」を作成している。しかし、この時点で作成された変化理由尺度は探索的な段階のものであり、自由記述では「関係に応じて、自己が自然・無意識的に変化する」という理由が多く見られたにもかかわらず、因子分析の結果では排除されてしまうなど、信頼性・妥当性ともに低いという問題点があった(佐久間・無藤, 2003)。

そこで、佐久間・無藤 (2003) は、新たに「自然・無意識」という観点を含んだ「変化動機尺度」を作成し、自尊感情との関連を検討している。そして、関係に応じた自己の変化に対する動機として、相手との関係を維持するために、相手に受け入れられるように自分を変化させる《関係維持》、相手との関係の中で

なんとなく自然に自分を変化させる《自然・無意識》、自分の嫌いなところや弱いところを隠し、違う自分を演じる《演技隠蔽》、相手との親密さや心を許している程度によって自分を変化させる《関係の質》の4因子、自己の変化に対する意識として、《肯定的意識》と《否定的意識》の2因子を抽出し、特定の動機と意識に関連があることを明らかにしている。また、関係に応じての自己の変化に対する《否定的意識》が自尊感情に負の影響を与えることも明らかにし、性差の検討では、関係維持、自然・無意識、関係の質は、男性に比べて女性の方が得点が高いことを示している。

自己の変化に対する動機や意識といった個人の自覚に着目した佐久間の一連の研究(佐久間, 2000, 2001, 2002, 2006; 佐久間・無藤, 2003)は、自己の変容性・多面性研究に新たな視点を提供した。しかし、変化動機尺度を構成する《関係維持》と《演技隠蔽》の下位尺度間に $r=.60$ の強い相関が見られ、様々な変数との関連を検討した結果からも、両者の質的な違いが明瞭でなく、その因子構造には疑問が残る。また、なぜ変化に対する動機や意識に個人差が生じるのかといった生起背景との関連に関しては検討されていない。

## (3) 自己の二側面: Connected-Self / Separated-Self

こうした関係に応じて自己を変化させる意識的・無意識的な動機(変化動機)や自己の変化に対する意識(変化意識)に差異が現れる背景には、個人が自己や他者をどのように捉え、関与しているかといったことが関連している可能性がある。つまり、共感的で親密な関係を維持することが重視され、他者との関わりの中で自己が捉えられている場合と、自己の独自性が重視され、他者から切り離された存在として自己が捉えられている場合では、自己を変化させる程度だけでなく、そのための動機や意識も異なることが考えられる。

山本 (1989) は、Gilligan (1977, 1982) の提唱した、自己を他者との関係の中で結合した存在として捉える Connected-Self (以下、C-self と記述) と、分離した存在として捉える Separated-Self (以下、S-self) という自己の二側面から自己のあり方を測定する CS 尺度を作成している。CS 尺度で捉えている C-self は、愛着と共感性の発達に基礎を持ち、他者の欲求・願望の充足を目指す行動として現れ、自己と他者とは互いの関係の中に埋没し責任を負い合う存在として把握される自己、と定義されている。また、S-self は、分離・個体化の発達に基礎を持ち、他者の反応によらない自律的行動として現れ、自己と他者は同等に不可侵の権利をもった存在として捉えられる自己、とされている。そして、両者はともに人間の本質であり、相互に

独立しているが、「究極的には統合に向かうもの」(Gilligan, 1977, 1982)として捉えられている。

山本(1989)は、作成したCS尺度を用いて青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討を行っている。その結果、男女の性差は、Connected/Separatedという自己の二側面の発達様相の違いとして捉えられ、男性においてはConnectedで示される親密性の課題が、女性においてはSeparatedで示されるアイデンティティ確立の課題が契機となって、成人期にはそれらの差異が解消される傾向にあることを明らかにしている。

#### (4) 本研究の目的

以上のことを踏まえ、本研究の目的は以下の2点とする。第1の目的は、佐久間・無藤(2003)で作成された変化動機尺度の因子構造の再検討を行うことである。変化動機尺度は、佐久間・無藤(2003)において信頼性・妥当性の確認が行われているが、下位尺度間に強い相関が見られていることから、今回の検討ではそれらが統合した形で抽出される可能性も考えられる。

第2の目的は、変化程度、変化動機、変化意識の特徴をより明確にするために、自己のあり方を捉えるCS尺度との関連を検討することである。他者との関係の中で自己を捉えるConnectedな側面が優勢な場合、より親密な他者関係を求めて、接する相手に応じてその都度自分を変化させることが予測されるため変化程度は増加し、変化に対する動機もより強く認識され、肯定的な意識を抱きやすいたことが考えられる。一方、他者とは分離された存在として自己を捉えるSeparatedな側面が優勢な場合、自分の独自性を重視するため、他者に合わせて自分を変化させる必要性を感じにくいことが予測されるため変化程度は減少し、変化に対して否定的な意識を抱きやすいたと考えられる。

## 2. 方法

### (1) 調査対象者と手続き

調査は2008年の6月から7月にかけて、A県の大学生416名(男性162名、女性254名)を対象に集団で実施した。調査対象者の平均年齢は、19.64歳( $SD=1.22$ , range=18~25歳)であった。また、男女別の平均年齢は、男性が19.74歳( $SD=1.27$ , range=18~25歳)、女性が19.57歳( $SD=1.18$ , range=18~24歳)であった。

### (2) 質問紙の構成

#### 1. 関係的自己尺度

先行研究(佐久間・無藤, 2003; 佐久間, 2006)で作成・使用された尺度をもとに、以下の通り、教示および尺度項目を一部改変したものを使用した。教示に

関しては、親や友人などの具体的な人物を例に挙げ、それらの人間関係の中での自分を想起しながら回答をするという教示方法から、教示の効果を上げることを目的に、本研究では、尺度回答前に自分を取り巻く人間関係を自由に想起してもらい、実際に記述してもらった後、回答してもらうという教示方法へ変更した。

①**変化程度** 人間関係に応じて自分がどの程度変わるのかについて尋ねた。評定は、「1. 全く変わらない」から「6. 非常に変わる」までの6件法で行った。

②**変化動機** 佐久間・無藤(2003)をもとに、佐久間(2006)で項目表現が変更された26項目(関係維持8項目、自然・無意識5項目、演技隠蔽7項目、関係の質6項目)を使用した。評定は、「1. そう思わない」から「5. そう思う」までの5件法で行った。先行研究(佐久間・無藤, 2003; 佐久間, 2006)では「1. 全くそう思わない」から「5. とてもそう思う」までの5件法であったが、予備調査の結果、表現の極端さから結果の偏りが見られたため、上記の表現を採用した。

③**変化違和感** 先行研究(佐久間・無藤, 2003; 佐久間, 2006)では、肯定的・否定的の2因子からなる変化意識尺度<sup>1)</sup>が用いられていた。しかし、項目内容が変化動機尺度と重複している部分が多く、変化動機尺度の回答結果に影響されることが懸念されたため、「相手によって自分が変わることをどのように感じますか」という1項目に変更した。評定は、「1. 全く違和感がない」から「6. 非常に違和感がある」までの6件法で行った。

#### 2. CS尺度

Gilligan(1977, 1982)が提唱したC-selfとS-selfという自己の二側面を測定するために山本(1989)が作成したCS尺度、31項目(C尺度19項目、S尺度12項目)を使用した。評定は、「1. 全く当てはまらない」から「4. よく当てはまる」の4件法で行った。

## 3. 結果

### (1) 変化動機尺度の因子分析

26項目のうち、天井効果が見られた3項目<sup>2)</sup>を除いた23項目に関して因子分析(主因子法, promax回転)を行い、固有値の減衰状況や説明率、解釈可能性から2因子を抽出した。因子負荷量が.35に満たない3項目(15, 21, 11)を削除した結果、第1因子15項目、第2因子5項目、計20項目が採択された。項目内容および回転後のパターンを表1に示す。

第1因子は、先行研究(佐久間・無藤, 2003; 佐久間, 2006)において、《関係維持》、《演技隠蔽》として抽出された項目で構成されている。いずれも、相手の気

持ちや関係の維持を考慮するために、あるいは、自分の嫌いなところを隠したり、よく見せるために、意識的・意図的に自分を変化させる項目であると考えられるため、「意図的变化」因子と命名した。

第2因子は、5項目すべてが佐久間・無藤(2003)の《自然・無意識》に相当するものであった。そこで本研究においても佐久間・無藤(2003)に倣い、第2因子を「自然・無意識」因子と命名した。

また、信頼性係数(Cronbachの $\alpha$ )は、意図的变化が $\alpha = .89$ 、自然・無意識が $\alpha = .88$ と、いずれも高

表1 変化動機尺度の因子分析  
(主因子法, promax 回転)

項目内容		F1	F2	
意図的变化 ( $\alpha = .89$ )	(維) 25 相手に嫌われたくないから	.75	-.08	
	(演) 24 相手に自分をよく見せたいから	.75	-.01	
	(演) 19 自分のいいところを見せたいから	.71	.00	
	(維) 5 相手との関係を壊したくないから	.67	-.16	
	(維) 22 相手とうまくやっていきたいから	.65	-.01	
	(演) 7 自分の嫌いなところを隠しているから	.64	.06	
	(維) 9 相手に自分をより受け入れてほしいから	.62	.02	
	(演) 16 自分の弱いところを隠しているから	.57	.05	
	(演) 2 相手の望む自分になろうとするから	.56	.02	
	(維) 13 相手を傷つけないから	.55	-.06	
	(演) 3 相手によって自分をどう見せたいかが違うから	.54	.08	
	(維) 23 相手の気持ちに応じるから	.52	.18	
	(維) 14 相手に自分を分かって欲しいから	.50	-.01	
	(演) 10 相手によって意識的に違う自分を演じているから	.48	.05	
	(維) 17 場の雰囲気を壊したくないから	.47	-.02	
	自然・無意識 ( $\alpha = .88$ )	(自) 20 相手との関係の中で自然に変化してしまうから	-.03	.82
		(自) 8 相手との関係の中で無意識に変化してしまうから	.01	.82
(自) 26 相手との関係の中でなんとなく変化するから		-.06	.79	
(自) 12 相手との関係の中で自動的に変化してしまうから		-.02	.78	
(自) 4 相手との関係の中で気づくと変化しているから		.14	.62	
(質) 15 相手との関係の中で立場が違うから		.23	.33	
(質) 21 相手によって付き合いの長さが違うから		.12	.28	
(質) 11 相手に対する好き嫌いがあるから		.28	.02	
因子寄与		5.89	2.68	
累積寄与率		29.46	42.89	
因子間相関		—	.24	

( ) 内は佐久間・無藤(2003)の下位尺度名: 維 = 関係維持, 演 = 演技隠蔽, 自 = 自然・無意識, 質 = 関係の質

表2 男女別の平均値とt検定の結果

	男性		女性		t値
	平均値	SD	平均値	SD	
C尺度	2.78 (.42)		2.91 (.40)		3.30**
S尺度	2.49 (.40)		2.37 (.42)		2.83**
変化程度	4.28 (1.08)		4.48 (.89)		2.06*
意図的变化	3.29 (.74)		3.47 (.65)		2.60*
自然・無意識	3.47 (.87)		3.82 (.83)		4.13**
変化違和感	2.99 (1.07)		3.13 (.97)		1.39

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

い内的整合性が確認された。そこで、対応する項目得点の加算平均値を算出し、各下位尺度の得点とした。

### (2) CS尺度の因子分析

31項目のうち、天井効果が見られた1項目<sup>3)</sup>を除外した30項目に関して因子分析(主因子法, varimax 回転)を行い、固有値の減衰状況や解釈可能性から2因子を抽出した。

第1因子は、山本(1989)のC尺度にはほぼ相当する16項目で構成されており、他者との関係の中で自己を捉えるC-selfの側面を反映していると考えられたため、山本(1989)に倣い「C尺度」と命名した。

第2因子は、山本(1989)のC尺度のうち「社会的能動性」と解釈された4項目とS尺度10項目、計14項目で構成されている。「社会的能動性」(山本, 1989)は、もともとSeparated-Selfの側面を想定して作成された項目であり、本研究においては、山本(1989)が当初想定していたように自己主張的な側面を表すものとして抽出されたと考えられる。そこで本研究では、山本(1989)に倣い、第2因子を「S尺度」と命名した。

また、信頼性係数は、C尺度が $\alpha = .84$ 、S尺度が $\alpha = .79$ と、いずれも高い内的整合性が確認された。そこで、対応する項目得点の加算平均値を算出し、それぞれC得点・S得点とした。

### (3) C・S得点と関係の自己の下位尺度得点の性差

性差に関し、C得点、S得点、変化程度得点、変化動機の2つの下位尺度得点および変化違和感得点のそれぞれについて、男女の平均値に有意差があるか検討するためt検定を行った(表2)。その結果、S得点のみ、男性の方が女性に比べて有意に高く( $t(414) = 2.83, p < .01$ )、C得点( $t(414) = 3.30, p < .01$ )、変化程度( $t(414) = 2.06, p < .05$ )、意図的变化( $t(307.82) = 2.60, p < .05$ )、自然・無意識( $t(414) = 4.13, p < .001$ )では、男性よりも女性の方が有意に得点が高かった。

### (4) C・S得点と関係の自己の下位尺度得点との関連

C・S尺度、変化程度、変化動機尺度の2下位尺度、変化違和感の各得点の相関を見たところ(表3)、C尺度は、意図的变化との間で $r = .18(p < .01)$ と変化違和感との間で $r = .11(p < .05)$ の弱い正の相関が見られた。一方、S尺度は、変化程度との間で $r = -.22(p < .01)$ 、意図的变化との間で $r = -.26(p < .01)$ 、自然・無意識との間で $r = -.12(p < .05)$ 、変化違和感との間に $r = -.17(p < .01)$ と弱い負の相関が見られた。

次に、性差を考慮して以下の分析を男女別に行った。まず、C得点の平均値(男性: 2.78, 女性: 2.91)、およびS得点の平均値(男性: 2.49, 女性: 2.37)を基準に高群・低群に分類した。そして、CおよびS得点の高低を独立変数とし、変化程度、変化動機の2下位



表3 CS 尺度と関係の自己尺度との相関係数

	I	II	III	IV	V	VI
I C 尺度	—	.00	-.07	.18**	.07	.11*
II S 尺度		—	-.22**	-.26**	-.12*	-.17**
III 変化程度			—	.20**	.27**	-.06
IV 意図的变化				—	.23**	.07
V 自然・無意識					—	.08
VI 変化違和感						—

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

表4 CS 尺度と関係の自己尺度との分散分析結果

男性	CL		CH		主効果		交互作用
	SL	SH	SL	SH	C 尺度	S 尺度	
変化程度	4.34 (1.07)	4.33 (1.03)	4.58 (1.06)	3.88 (1.12)	.36	4.35	4.19*
意図的变化	3.32 (.72)	3.35 (.86)	3.37 (.71)	3.09 (.64)	.75	1.14	1.76
自然・無意識	3.34 (.90)	3.47 (1.04)	3.64 (.66)	3.43 (.79)	.87	.06	1.55
変化違和感	3.09 (1.00)	2.77 (1.08)	2.93 (1.05)	3.21 (1.14)	.68	.01	3.11

  

女性	CL		CH		主効果		交互作用
	SL	SH	SL	SH	C 尺度	S 尺度	
変化程度	4.61 (.84)	4.52 (.84)	4.64 (.72)	4.08 (1.07)	3.44	8.37	4.57*
意図的变化	3.46 (.52)	3.23 (.61)	3.70 (.59)	3.39 (.79)	6.08*	11.66**	.32
自然・無意識	3.90 (.84)	3.00 (.73)	3.92 (.83)	3.71 (.90)	.02	3.79*	.00
変化違和感	3.13 (1.01)	2.93 (1.05)	3.34 (.84)	3.02 (.95)	1.61	4.65*	.22

CL: C 得点低群, CH: C 得点高群, SL: S 得点低群, SH: S 得点高群  
 上段: 平均値, 下段: 標準偏差  
 \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

尺度, 変化違和感を従属変数とする分散分析を行った。各群におけるそれぞれの尺度得点の平均値と分散分析の結果を表4に示す。

その結果, 変化程度に関しては, 男女ともに有意な交互作用が見られた(男性:  $F(1,158) = 4.19, p < .05$ , 女性:  $F(1,250) = 4.57, p < .05$ )。そこで単純主効果の検定を行ったところ, 男性においては, C 得点高群において S 得点の単純主効果が有意であり ( $F(1,158) = 8.27, p < .01$ ), S 得点低群の方が高群よりも変化の程度が高かった。女性においては, S 得点高群における C 得点の単純主効果が有意であり ( $F(1,250) = 6.98, p < .05$ ), C 得点低群の方が高群よりも変化の程度が高かった。

変化動機尺度の下位尺度である意図的变化に関しては, 女性のみ C 得点 ( $F(1,250) = 6.08, p < .05$ ) および S 得点の主効果 ( $F(1,250) = 11.66, p < .01$ ) が見られた。

しかし, C 得点低群に比べて高群の方が意図的变化得点が高いのに対して, S 得点高群よりも低群の方が意図的变化得点が高い傾向があった。また, 自然・無意識では, 女性のみ S 得点の有意な主効果 ( $F(1,250) = 3.79, p < .05$ ) が見られ, S 得点低群の方が高群に比べて自然・無意識得点が高いという結果が得られた。

変化違和感に関しては, 女性においてのみ S 尺度の有意な主効果が見られ ( $F(1,250) = 4.65, p < .05$ ), 低群の方が高群に比べて変化違和感得点が高かった。

## 4. 考察

本研究の目的は, 第1に, 佐久間・無藤 (2003) で作成された変化動機尺度の因子構造を再検討し, 関係の自己に関する変化動機の構造を明確にすることであった。第2に, 関係の自己における変化程度, 変化動機, 変化違和感について, C-self および S-self との関連を検討することにより, その特徴を明らかにすることを目的とした。以下, これら2点について考察する。

### (1) 関係の自己の「変化動機」の構造

関係の自己の「変化動機」については, 因子分析の結果, 「意図的变化」と「自然・無意識」の2因子が見出された(表1)。つまり, 関係の自己の変化動機概念は, 相手によって自己を「意図的」に変化させる「意図的变化」と, “無意識”に変化してしまう「自然・無意識」の2因子構造であると考えられる。このうち, 意図的变化は, 佐久間・無藤 (2003) で強い相関がみられた《関係維持》と《演技隠蔽》が統合されたものであり, 本研究での仮説を支持する結果となった。

しかし, 佐久間・無藤 (2003) における《関係の質》の6項目については, 本研究では, 天井効果や因子負荷の低さから全て除外される結果となった。このうち, 天井効果が見られた3項目は, いずれも「相手との親密さ」という私的な文脈での関係の質によって自己を変化させるというものであるが, そのような心的態度は, 現代の大学生にとって, 非常に当たり前で当然のこととして受け入れられていることが推察される。また, 残りの3項目は因子分析で排除されたが, これには二つの理由が考えられる。これら3項目は立場・付き合い・好悪など, 一見, 社会的文脈での関係の質に関するものであると言えそうだが, 一つの因子として抽出されなかったということは, こうした関係の質には幅があり, 関係の自己の変化動機としてはまとまった概念を構成するには至らなかったと考えられる。加えて, 今回抽出された2因子のいずれにも含まれなかったことから, こうした社会的文脈での関係の質は, 相手との間で自分を「意図的」に変化させることもあれば, 「自

然・無意識」に変化してしまうこともあること、あるいは、「意図的」に変化させる人もいれば、「自然・無意識」に変化してしまう人もいることなど、意図的／無意識のどちらかと線的に結びつくものでなく、個人や場合により異なる可能性が考えられる。

## (2) 性差の検討

C・S得点、関係的自己の下位尺度得点については、変化違和感を除いた全てに性差が見られた(表2)。

### ① C-self および S-self

C-self, すなわち他者との関係の中で自己を捉える傾向は、男性に比べて女性の方が高く、S-self, すなわち自他の区別が明確で自律的なものとして自己を捉えようとする傾向は、女性に比べて男性の方が高い。これは、先行研究(山本, 1989)を支持するものであり、本研究においても、共感的で親密な関係を維持することを重視し、他者との関係の中で自己を捉える女性と、個性や自律性を重視し、他者とは分離した存在として自己を捉える男性という従来から指摘されるあり方、性役割観を反映した結果であったと言える。

### ② 関係的自己(変化程度・変化動機・変化違和感)

関係的自己については、変化程度、意図的変化、自然・無意識で男性よりも女性の方が高いという結果が得られた。すなわち、男性に比べて女性の方が、関係に応じて自分が変化する程度が高いと感じており、また、その理由も強く意識していることが示唆された。

このうち、「自然・無意識」に関しては、先行研究(佐久間・無藤, 2003; 佐久間, 2006)を支持する結果が得られており、男性に比べて女性の方が、自然に、無意識的に自己が変化していると感じやすいと言える。

一方、「意図的変化」に関しては、先行研究(佐久間・無藤, 2003; 佐久間, 2006)における《関係維持》では女性の方が高いという本研究と同様の性差が見られているが、《演技隠蔽》では性差がみられておらず、本研究とは異なる。また、「変化程度」に関しても、大学生を対象にした先行研究(佐久間, 2001, 2006; 佐久間・無藤, 2003)では性差が認められていない。

このように、先行研究に比べ、関係的自己のより幅広い側面で性差が認められた要因として、調査対象者の特性に加えて、教示方法の変更が影響している可能性が考えられる。本研究では、教示の効果を上げることを目的に、回答前に自分を取り巻く人間関係を記述してもらおうという先行研究とは異なる教示方法を採用している。それにより、回答者がより実感を伴ったものとして自己の変化を捉えることが可能となり、男女の差異がより明確に現れたと考えられる。

一方で、本研究では先行研究(佐久間, 2001, 2006; 佐久間・無藤, 2003)同様、変化をどのように意識し

ているかに関しては性差が認められなかった。このことから、変化に対して肯定的か否定的かといった明確に区別された感覚であるか、あるいは漠然とした違和感かに限らず、その感覚には幅があること、またその幅は男女ともに共通して見られることが示唆される。

## (3) 関係的自己とC-self およびS-self との関連

### ① 変化程度とC-self / S-self との関連

分散分析の結果、C・S得点の高低の組み合わせによって、男女で異なるパターンを示すことが明らかになった(表4)。

男性では、既に見たように、全体としてはS-self傾向が女性より高く、C-self傾向は女性より低い。関係的自己の変化を感じる程度(変化程度)に関しても、女性より低いという結果が得られた。しかし、C-self傾向が低い場合は、S-self傾向の高低によって、関係的自己の変化程度に違いはないが、C-self傾向の高い人の場合は、S-self傾向の高低によって、関係的自己の変化程度が異なってくるという交互作用が見られた。つまり、他者との関係の中で自己を捉える傾向(C-self)の高い人においては、自他の区別が明確で自律的な傾向(S-self)が高い人ほど、関係に応じて自己が変化していると感じる程度が低く、逆に、自他未分化(S-self傾向が低い)な人ほど関係的自己の変化を感じる程度が高いということが明らかになった。

これに関し、男性では、大学生から成人期前期にかけてC得点の上昇が見られ、親密性の課題がより重要になることが指摘されている(山本, 1989)。この点を踏まえると、親密性の課題への過渡期にあたり、相対的に他者との関わりが重要になる大学生の男性において、親密性課題の前段階として位置付けられているアイデンティティ確立の課題の達成度によって、関係的自己における変化を感じる程度に違いが生じる可能性を示唆すると考えられる。つまり、C-self傾向の高い人のうち、S-self傾向も高い人の場合、自己が他者、すなわち自己とは異なるものと心的次元で区別された自律的な存在として捉えられている傾向が高いからこそ、他者の他者性を受けとめることができ、安定して他者に関わることが可能になるため、相手によって自己が変化すると感じる度合いが低くなると考えられる。

加えて、C-selfが高くS-selfが低い場合は、自他が未分化で自律性が低く、関係に埋没したあり方であるため、自分がどうしたいかよりも「相手がどうしたいか」、「相手にどう思われるか」といった他者を基準にするため、接する相手によってさまざまに影響を受け、いわば他者に巻き込まれる形で、自己の変化を感じる程度が増すと考えられる。

一方、女性では、既に見たように、全体としては

S-self 傾向が男性より低く、C-self 傾向と変化程度は男性より高い。しかし、S-self 傾向の低い人の場合、C-self 傾向の高低によって関係的自己の変化程度に違いはないが、S-self 傾向の高い人においては、C-self 傾向の高低によって変化程度が異なるという交互作用が確認された。つまり、自他の区別が明確な人（S-self 傾向が高い）においては、他者との関係の中で自己を捉える傾向（C-self）が高い人ほど、関係的自己の変化を感じる程度が低く、逆に関係の中で自己を捉える傾向の低い人の方が、関係的自己の変化を感じる程度が高いことが明らかになった。

これに関し、女性においては、男性とは異なり、アイデンティティ確立の課題が親密性課題と並行して進行し、他者との関係性を維持する過程の中で自己を作り上げていくことが指摘されている（伊藤，2000）。また、山本（1989）では、女性においては、高校生から大学生にかけてS得点の上昇が見られ、アイデンティティ確立の課題が相対的に重要になることが指摘されている。このことから、自己の独自性・自律性が意識に強くなるばかり始める時期である大学生の女性では、男性とは異なり、自己の独自性・自律性の意識が強い場合に、自己を他者との関係の相でも捉えているかどうかによって、関係的自己の変化幅を感じる程度といった内的な体験やあり方が大きく二通りに異なるといえる。

つまり、自己を独自性の相（S-self）と他者との関係の相（C-self）の両方から捉える傾向が高ければ、自己とは異なるものと心的次元で区別される自律性を見だしているからこそ、関係に埋没した自己のあり方ではなくなり、かつ、関係に応じて自己が変化することについても、それが他者を軸とするのではなく、自己を軸とした変化として感じられるために、相手によって自己が変化すると感じる度合いが低くなると考えられ、この点については、男性の場合と同様と考えられる。しかし、自己の独自性を強く認識（S-self 傾向が高い）していたとしても、関係の中で他者と繋がった存在として自己を捉える（C-self）傾向が低ければ、それは他者との関係の中で自己を確立していく（伊藤，2000）とされる女性において、未だ安定した自己とは言い難いため、自己の変化を感じる程度が増すと考えられる。

加えて、自己を独自性・自律性の相で捉える傾向（S-self）が高くても、関係性の相で自己を捉える傾向（C-self）が低い場合には、高い場合と比べて自己の変化を大きく見積もるということは、実は他者に影響を受けて自己が変化してしまう感覚を「自分のもの」という感覚では捉えられないために、自己を支えるあり

方としてC-selfよりS-selfが自ずと選択されているものと考えられる。その一方で、そのようなあり方で自己を保つ中で、関係的自己の変化を感じていることは、関係の相における自己（C-self）を捉えていく萌芽となりうる心的動きとも考えられ興味深い。

#### ②意図的变化とC-self / S-self との関連

分散分析の結果、女性のみ意図的变化とC-self / S-self との関連が見られ、C-self 傾向が高い人ほど、また、S-self 傾向が低い人ほど、意図的变化をより強く意識するという傾向が明らかになった（表4）。このことから、女性における、関係的自己の意図的变化には、他者との関係を維持したい、あるいは、自分をよく見せたいといった自己の内的基準を主体に変化するという主体的な側面と、自他が未分化なために他者の欲求や願望を満たすために、他者の期待に添うように他者基準に変化しているという主体性の低い側面があることが明らかになった。

#### ③自然・無意識とC-self / S-self との関連

分散分析の結果、女性においてのみ自然・無意識とS-self との関連が見られ（表4）、自他の区別が明確な人ほど関係的自己が自然・無意識的に変化するとは感じにくく、自他未分化な人の方が相手によって自己が無意識のうちに変化していると感じやすいことが明らかになった。これは、自然に、無意識的に自己を変化させるということが、自身の意志や判断とは関係なく、他者や環境の要求を察知し、無意識的にそれに応じる形で変化していく傾向を示すものであるといえる。

#### ④変化違和感とC-self / S-self との関連

分散分析の結果（表4）、女性においてのみ、変化違和感とS-self との関連が認められ、自他の区別が明確な人ほど関係的自己の変化に対して違和感を感じにくく、曖昧な人の方が変化に対して違和感を感じやすいことが明らかになった。上記の自然・無意識との関連についても合わせて考察すると、状況に合わせて自然に自己を変化させていくという行動は、変化の主体である女性にとっては、必ずしも肯定的に捉えられていないことが明らかになった。

#### (4) 結論および今後の課題

本研究では、関係的自己における変化の程度や動機、意識とCS尺度との関連を検討することで、自己や他者の捉え方、関与の仕方の違いによって関係的自己に対する自覚の仕方に個人差や性差が生じること、また、その差異は、自己形成における発達のプロセスと関連している可能性が示唆された。

本研究で使用した変化動機尺度の中には、「自然・無意識」という個人の無意識的な動機に注目した項目が存在している。しかし、本研究および佐久間の一連

の研究 (佐久間・無藤, 2003; 佐久間, 2006) においても、質問紙による調査ということもあり、その特徴は検討されていない。今後は、無意識レベルにもアプローチ可能な投影法などを用いて、自己の変化を意識面と無意識面の両面から捉えるといった、より包括的な検討が必要であると考えられる。

## 【注】

- 1) 肯定的意識は、「必要」、「当然」、「自然」の3項目、否定的意識は、「演じているようで嫌だ」、「自分から分からなくなるようで怖い」、「上手くできない」、「疲れる」の4項目から構成されている。
- 2) 天井効果が見られた3項目は、「1. 相手によって心を許している程度が違うから」、「6. 相手によって親密さの程度が違うから」、「18. 相手によって自分の内面を見せられる度合いが違うから」である。
- 3) 天井効果が見られた項目は、「1. 人から非難されると非常にこたえる」である。

## 【引用文献】

- 新田静枝・堀毛一也 (2007). 自己の変異性と制御焦点との関連について 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 16, 172-173.
- Baldwin, M. W. (1992). Relational schemas and the processing of social information. *Psychological Bulletin*, 112, 461-484.
- Donahue, E. M., Robins, R. W., Roberts, B. W., & John, O. P. (1993). The divided self: Concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 834-846.
- 榎本博明 (2002). 自己概念の場面依存性について 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 28, 97-115.
- Gilligan, C. (1977). In a different voice: Women's conceptions of the self and morality. *Harvard Educational Review*, 47, 481-517.
- Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (ギリガン, C. 岩男寿美子 (監訳) 生田久美子・並木美智子 (共訳) (1986). もうひとつの声—男女の道徳観の違いと女性のアイデンティティ 川島書店)
- Harter, S., & Monsour, A. (1992). Developmental analysis of conflict caused by opposing attributes in the adolescent self-portrait. *Developmental psychology*, 28, 251-260.
- Kelly, G. A. (1955). *The psychology of personal constructs*. New York Norton.
- Linville, P. W. (1987). Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 663-676.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the Self: Implications for Cognition, Emotion, and Motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Markus, H., & Wurf, E. (1987). The dynamic self-concept: A social psychological perspective. In M. R. Rosenzweig & L. W. Porter (Eds.), *Annual review of psychology*. 38, CA: Annual Reviews. pp.299-337.
- 斎藤誠一 (1996). 青年期の間関係 人間関係の発達心理学 4 培風館
- 佐久間路子 (2000). 多面的自己—関係性に注目して—お茶の水女子大学人文科学紀要, 53, 435-451.
- 佐久間路子 (2001). 関係に応じた自己の変異性の理解: 変化理由と変化意識に着目して お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化論叢, 4, 85-94.
- 佐久間路子 (2002). 関係的自己の変異性の理解: 大学生と主婦の比較 お茶の水女子大学人文科学紀要, 55, 307-317.
- 佐久間路子 (2006). 幼児期から青年期にかけての関係的自己の発達 風間書房
- 佐久間路子・無藤隆 (2003). 大学生における関係的自己の変異性と自尊感情との関連 教育心理学研究, 51, 33-42.
- Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- 伊藤美奈子 (2000). 個人と社会という観点からみた成人期女性の発達 岡本祐子 (編) 女性の生涯発達とアイデンティティ—個としての発達・かかわりの中での成熟— 北大路書房 Pp.87-112.
- 高田利武 (2004). 「日本人らしさ」の発達社会心理学 自己・社会的比較・文化 ナカニシヤ出版
- 山本里花 (1989). 「自己」の二面性に関する研究—青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討— 教育心理学研究, 37, 302-311.
- 吉田琢哉・高井次郎 (2008). 期待に応じた自己認知の変容と精神的健康との関連: 自己概念の分化モデル再考 実験社会心理学研究, 47(2), 118-133.